

「風力発電と野鳥」特集にあたって

Strix 編集部

2011年3月11日に起きた東日本大震災における福島第一原子力発電所の事故をきっかけとして、さまざまな自然再生エネルギーの導入が進められている。その一環として、風力発電施設の建設や計画が各地で相次いでいる。風力発電では、発電にともなう二酸化炭素の排出量は火力発電に比べれば少なく、放射性廃棄物が出ることもない。一方で、発電施設建設地の自然環境が消失、改変されることは避けられない。また、稼動時には、施設（風車）から低周波が発生したり、風車に鳥類やコウモリ類が衝突するという問題が生じている。

今号では、特にこの風力発電と鳥類をとりまく問題について、特集を組むこととなった。本特集に掲載したのは3本の論説と2本の原著論文である。

3本の論説では、風力発電施設の建設や設備の維持にともなって、野鳥にどんな影響があるか、またそれにどのように対応すべきか、という話題について、国内外の様々な事例を通して紹介していただいた。それぞれが、総括的な内容、実際に国内事業（北海道フレシマ）に対応した事例、海外（ドイツ）のゾーニング事例の紹介、となっている。風力発電に限らないが、エネルギー関連事業には常にメリットもデメリットもある。野鳥観察をたしなむ読者の方々であっても、風力発電については賛否両方の感情があると想像される。風力発電をめぐるのは、既に多くの分野、多くの人たちが関わっており、発信される情報も増える一方である。諸方面から発信される断片的な情報だけに振り回されているのは、この問題を理解することはなかなか難しいだろう。今回の論説のように、ひとつの目的、ひとつのテーマをもって集約された情報というのは、この問題を理解したい読者にとって、とても高い価値があると思われる。

2本の原著論文は、日本において数少ないこの分野のスペシャリストに寄稿していただいた。いずれの論文も鳥（ワシやカモメなど）が風車に衝突する可能性に着目したもので、具体的なデータに基づいた解析結果や考察を読むことができる。偶然だが、この2本は同じ場所（北海道苫前町）の風力発電施設を調査地としており、同地で研究された関連論文も既にいくつか報告されていることから、この地域は、風車と野鳥を扱った研究が進んでいるひとつのモデル地とみなせるかもしれない。そのような調査地で蓄積される研究例は、今後の研究の発展や解決策の模索を支えてくれる貴重なものになるだろう。

今回の特集が、読者のみなさまにとって、私たちと野鳥とが共存していくうえで、何がどう問題なのか、どのくらい問題なのか、といったことを考える一助となれば幸いである。